

四川省の少数民族言語からアジアの「雨が降る」文へ

白井聡子 しらいさとこ / 東京大学、AA研共同研究員

中国内陸の小さな言語の研究が、
多くの知の集積と地理言語学という枠組みを得て、
大きくアジア広域の言語地図につながった。

ダバ語との出会い

中国内陸部には未知の言語がある。そんな話を授業で聞いたことがきっかけで、現地調査に踏み出した。当時はちょうど中国の「改革開放」路線がピークにあった頃で、それまで外国人の入域を拒んでいた四川省西部の少数民族地帯も、比較的自由に訪れられるようになっていた。

成都から長距離バスに乗り、西へ。^{アルラン}二郎山（標高3437m）の向こうは、湿った盆地から乾いた高原へ、空気ががらりと変わる。中国語で康定、チベット語でダルツェンドと呼ばれる地方都市に着くのに、当時は丸1日かかった。翌早朝、別の長距離バスに乗り、折多山（標高4298m）を越えて道孚^{タオフ}（タウ）へ。この町で出会ったのが、ダバ語という、それまで概要しか知られていなかった言語の話し手だった。（なお、近年では道路の整備が進み、成都から道孚まで1日で行くことも可能。）

本来、言語に「小さい」という形容は不適切かもしれないが、標高3千メートルほどの辺鄙な谷あいの住人たちが約1万人に

よって話され、文字も古い記録もないこの言語は、多くの話者数と高度な文字文化を持つ漢語やチベット語の狭間にあつて、自他共に「小さい」と認識されているようだった。実際、ダバ語の話し手自身が、その言葉を教えてほしいと言う私に「これを覚えても使えないよ、チベット語を勉強した方がいいんじゃないの？」と返すこともしばしばだった。「小さいから知られていない」「知られていないからこそ知る価値がある」と、説得しながら調査をした。

多言語地帯を「面」として捉える

ダバ語が話される地域は、チベット言語文化圏の東端、漢語エリアとの狭間にある、多言語地帯として知られる。四川省西部の多民族が蟠集する細長い地域、ということで、「川西民族走廊」と呼ばれることもある。南北600km余り——東京から青森ほど——の範囲に、互に通じない、しかし共通する特徴を持つ言語が、少なくとも十数種類、話されている。このあたりの地形図からは、4千メートル級の稜線が連な

て複雑な起伏を見せ、その間を刻むように流れる川沿いに点々と人里があることが見て取れる。話し手たちが、川伝いに移住し、あるいはわずかに交流し合いながら、山あいに身を潜めるようにして言語文化を受け継いできた歴史が想像される。

この多言語地帯の研究は、従来の比較言語学的研究からは、なかなか決定打が出ないままだった。大学院時代の恩師である故^{しょうがいと}庄垣内正弘先生が指導の際に繰り返した「あの中あたりの言語は、『面』で見なイカン」とコメントしてくださった。一つの言語の記述に集中する「点」の研究でもなく、変化を縦の時間軸に沿って紐解く「線」の研究でもなく、同じ平面上に存在する周辺言語と関わる中で形成されてきた言語特徴を研究する、というような意味であったと理解している。最初は何よりもダバ語の音声の記録から文法を分析することで手一杯だったが、この言葉がずっと頭にはあった。次第に、地理的に近い言語と対照するといった工夫を心がけるようになった。とは言え、実際に『面』で見る」研究が何で、それによって何がなせるのか、手探りの状態が続いた。

私にとって、“geolinguistic…”（地理言語学的～）をタイトルに入れた最初の研究は2013年のもので、このときがこの学問分野との出会いであったと思われる。そのときの発表内容は、遠藤光暁先生から教わった方法で地図上に言語特徴の分布を示してみただけで、踏み込んだ分析をせずに終わっているというお粗末なものだった。し

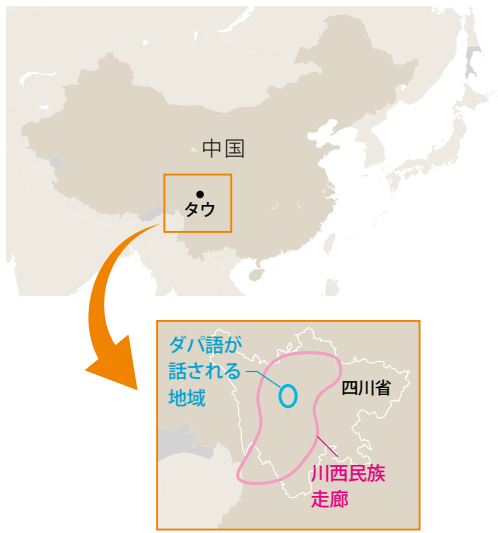
*写真はすべて筆者撮影。



寺院がある高台から見たダバの風景。遠くに段々畑も見える。



麦を刈るダバの人々。斜面の小さな段々畑で、ハダカムギの一種を栽培している。



ダバの家屋。家は、村の人々で協力し合っ
て、石を積み上げて作る。屋上に麦干し
スペースがあり、最も高いところにある部
屋は仏間になっている。



ダバの人々。このおばあさんは、前髪を切りそろえた、
ダバの特徴的な髪型(チベット風ではない)をしている。



ダバの集落の一つ。上から見下ろして撮っ
たもので、集落の向こうに谷があり、その
向こうがまた山という構図。

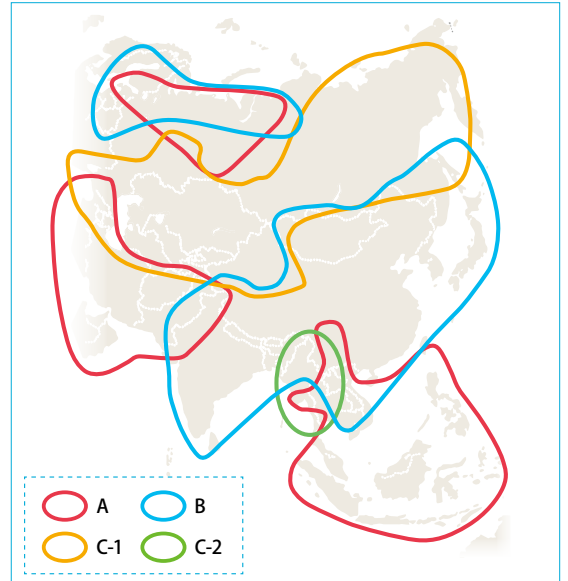


図 「雨が降る」文のタイプ分布概略図。

かし今その言語地図を見てみると、はっきりと地理的に偏った分布が出ていて興味深い。この稚拙なトライアルから出発して、先達の素晴らしい研究に触れる機会も増え、次第に、この方法が川西民族走廊の言語特徴形成過程を捉える上で有効であるとの認識を深めるようになった。

「降雨現象」をどのように表すか？

2015年に「アジア地理言語学研究」プロジェクトが始まった。第1期の最後のテーマとして「雨が降る」を意味する文のタイプを扱うことになり、その取りまとめをさせていただくことになった。ダバ語の表現は、タイプとしては日本語に似ている。名詞mokku「雨」を主語とし、動詞te「来る」の前に下向きの方を表す接辞a-を付けて、「mokku a-te...」(雨が下りて来る)のように言う。しかし「雨が降る」の表し方は言語によってさまざまで、「雨が降る」を表す文のタイプだけを扱った論文がいくつもあるほどだ。特に、非人称的な文として言語類型論的観点から研究されている。これを調べる中で出会った、『言語学大辞典 第六巻 術語編』(三省堂)の「非人称動詞」にある次の説明が、私の目から鱗を落としてくれた。「(日本語の) 雨が降ルという表現も事実にはそぐわない形式的な構文である。というのは、これも降雨現象を述べているだけで、雨というものがあって、それが降るのではない。」つまり、雨というモノはなく、コップに入れてしまえばただの水だ。それが上空から降ってきてはじめて雨である。

ここからは、その現象の総体を、上の説明にもあるように「降雨現象」と呼ぼう。降雨現象は総体的で、そこに名詞も動詞もないが、人はそれを言語の文に合わせた形で表現しなければならない(分かりやすく

するために、文の中心となる「述部」を「動詞」、文に欠かせない名詞句である「項」を「名詞」として話を進めることにする)。だから、英語の「It rains.」のように、降雨現象を動詞中心で表す言語(タイプA)もあれば、日本語の「雨が降る」「雨だ」のように名詞中心で表す言語(タイプB)もあり、また、どちらが中心とも言えない、言い換えるとどちらも同等に重要であるタイプの言語(タイプC)もある。例えば、トルコ語では、「yağmur yağ-...」のように、名詞も動詞も yağ- という降雨現象を表す語根から作られたものを使うのだそう(図のC-1)。ビルマ語(ミャンマー)では、「mo: jwa-...」のように言うが、一見まったく異なる形をした mo: (名詞)も、jwa (動詞)も、降雨現象を表す。このほか、そもそも、「雨」のような名詞も「rain」のような動詞もなく、「水が落ちる」のように別の意味の語を組み合わせる降雨現象を表すという言語もある(図のC-2)。

一つの「点」からアジアの「面」へ

類型論的分類を踏まえ、プロジェクトに参画する専門家たちから各言語グループの情報と地図をいただき、分析に取りかかっ

た。それぞれのタイプが地図上のどの場所に見られるかを確認し、地理的につながっているところを線で囲んでいった。その結果、図のようなアジア全体の分布図を描くことができた。この地図から、次のような歴史的変遷を仮定することができる。最初にタイプAがあり、タイプBがあとから広がった。これにより、タイプAが分断され、端の方に残った。タイプCはさらに後から騎馬民族の移動と共に広がったり、所々で発生したりしたタイプと考えられるだろう。

このプロジェクトは、大言語からあまり知られていない小さな言語まで、多くの言語のデータをくみ上げているのが特徴である。その多くは、私がダバ語の調査に取り組んだのと同様の、一つ一つの言語調査、記述、分析を背景にしている。そうして記録されたデータが、数百、数千と蓄積される。それらを一つのテーマの元に切り取り、地理言語学という研究方法を用いて分析する。小さな点からアジア全域を覆う広大な面へと、一直線につながり広がる、そんな学問の妙に触れえたことに感謝したい。FP